

<p>第1章 生物多様性さっぽろビジョン改定の背景</p>	<p>1 生物多様性に関する最近の動向 (1) 生物多様性の喪失 (2) 愛知目標と生物多様性に関する世界の状況 (3) 国の動き (4) 札幌市の動き</p>	<p>2 これまでのビジョンに基づく取組の進捗状況 (1) 指標の確認方法 (2) 指標に係る目標値の達成状況</p>	<p>3 ビジョン改定の目的 (1) 目標年次2020年度として見直しについて言及 (2) 国家戦略の改定 (3) ビジョン運用により認識した課題の解決</p>	
<p>第2章 現状への課題</p>	<p>生物多様性に関する現状に関する課題（例） 保全事業の充実、外来種の侵入、野生動物とのあつれきの増加、気候変動対応、人口減少による担い手不足の懸念、再生可能エネルギーと生物多様性保全の調整など</p>			
<p>第3章 ビジョンの位置づけ</p>	<p>1 生物多様性基本法第13条に基づく札幌市の生物多様性地域戦略であること</p>	<p>2 国家戦略、道計画との位置づけ、札幌市の関連計画との位置づけ（関係図）※他部局との事業との関わりなどを記載</p>	<p>※基本構成、伝え方 全体構成の整理、ポスターなどの絵で表現、ビジョンの説明やイメージ、具体的にやるべきことの記載、丁寧な説明、身近なトピックからかみ砕いて伝える、危機感を出しすぎず、札幌の自然が好きという感覚を大事にできる伝え方、なぜこのような政策なのかを明確に。</p>	
<p>第4章 理念</p>	<p>※ポジティブなメッセージ、「生物多様性さっぽろビジョン」を表す言葉</p>			
<p>第5章 目標年次及び対象区域</p>	<p>2050年まで（見直しは2030年）</p>	<p>札幌市全域、市域だけで解決できない取組は周辺自治体との連携を図る</p>	<p>※全体に取り入れる考え方、視点 温暖化、気候変動による生態系の変化への対応、人為的な管理による保全、SDGs、循環型社会、持続可能性、防災、心理的・身体的に影響する身近な自然環境の回復・維持、四季の魅力、生態系サービスの社会・文化的側面の評価視点、Eco-DRR、生物との共生の考え方、身近な行為についての生物多様性への配慮等</p>	
<p>第6章 札幌市の自然環境</p>	<p>人口の概要、市域面積、高度、代表的な生態系（指標種）、札幌市の地理的特徴等 ※札幌の四季の魅力</p>			
<p>第7章 ゾーニング</p>	<p>山地ゾーン、山麓ゾーン、市街地ゾーン、低地ゾーン、各ゾーンをつなぐ生態系 ※市街地ゾーンを業務系と住居系などに分けても良いのでは？</p>			
<p>第8章 目標（あるべき姿）及び進捗管理</p>	<p>ゾーンごと（主体、生態系サービスごと）のあるべき姿を記載 ※具体的に何を保全し、どのような方法で生物多様性保全を図るのかという目標を提示</p>	<p>1 指標とモニタリング方法 2 2030年までの目標値 3 2050年最終目標（可能なら数値目標）</p>	<p>4 札幌市は消費都市であり、人間活動の影響の大きさを踏まえ、地球規模で生物多様性に配慮した取組を行う…など</p>	
<p>第9章 施策を進めるにあたっての基本方針</p>	<p>1 将来も持続可能な利用ができるよう、札幌市内の生物多様性を保全する</p>	<p>2 生物多様性への理解を深め、将来に伝える</p>		<p>3 様々な立場と連携協働して生物多様性の保全を進める</p>
<p>第10章 指標に基づいた目標を達成するための施策</p>	<p>1 保全事業 (1) レッドリストの定期的な見直しと掲載種の保全事業の検討、実施 (2) 外来種対策 (3) 野生鳥獣とのあつれき対策 (4) 防災、減災につながる自然機能の活用</p>	<p>2 普及啓発事業 (1) イベント (2) 学校教育との連携事業、環境教育 (3) 各種普及啓発ツールの作成、活用</p>	<p>3 調査事業 (1) 市民参加型指標種調査 (2) 自然環境調査 (3) 協働型生き物調査 (4) 動植物データベースの活用</p>	<p>4 企業や施設との連携事業 (1) 生物多様性さっぽろ応援企業、団体登録 (2) 生物多様性さっぽろ活動拠点ネットワークとの連携事業</p>
<p>第11章 ビジョン推進の体制と役割分担</p>	<p>札幌市、市民、事業者（企業団体等）それぞれが何をするのか</p>			

